

沖縄県における画像資料の保存と活用の現状

池田榮史(琉球大学法文学部教授)

1. はじめに

沖縄県は九州島から台湾島までの間に点在する琉球列島のなかで、ほぼ中央に位置する沖縄諸島と南西に位置する宮古・八重山諸島、さらには東に位置する南・北大東島からなる島嶼県である。琉球列島の北端に位置する大隅諸島からトカラ列島、奄美諸島までの島々は、中世の段階まで沖縄島に王城を置いた琉球王国の版図であったが、近世にいたって裂き取られ薩摩藩の支配下に入った歴史を持つ。

このような日本本土との歴史・文化の相違とともに、沖縄県下の島々は太平洋西岸を流れる暖流(黒潮)の流路上に位置し、気候帯の上では亜熱帯に属する。このため、自然環境も日本本土とは異なり、亜熱帯特有の動物相や植物相が発達する。

したがって、沖縄県に残る画像資料は、写された被写体そのものが文化的にも自然的にも独自の特性をもっているだけでなく、その保存に関しても、湿度の問題をはじめとして、日本本土と異なる環境の中に置かれてきたこととなる。本稿では、このような沖縄県における画像資料の状況について、報告することとする。

2. 沖縄における画像資料の特徴

沖縄において、いつ頃から画像資料が作成され始めたについては、詳らかでない。その中で、比較的初期の段階の資料と考えられるのは、鳥居龍蔵氏による写真資料である。東京帝国大学理科大学の助手として勤務していた鳥居氏は、明治29(1896)年および明治37(1904)年の2回にわたって、沖縄調査を実施している。1回目の調査は台湾調査の帰路、沖縄に立ち寄った程度のもので、2回目の調査の予備調査的色彩が強いものであった。1904年に行った2回目の調査では、約二ヶ月間をかけ、沖縄島だけでなく、宮古・八重山まで足を延ばし、精力的な調査を行っている⁽¹⁾。鳥居氏が東アジア各地の調査に際して撮影した写真資料は、東京大学総合研究資料館や韓国国立中央博物館などに保管されていることが知られている。この中で、沖縄での撮影資料については、東京大学総合資料館に写真乾板179枚が保管されており、これらは先の沖縄調査時のものと考えられる⁽²⁾。この他、鳥居氏以外にも、沖縄を訪ねた様々な分野の人々があり、多くの写真資料が遺されたものと推測されるが、比較的まとまった研究資料としては、鳥居氏の資料が出色のものである。

また、続く大正期から昭和期にかけては、写真の技術も一般化し、沖縄でも写真を撮影することが、それほど珍しいことではなくなっていくと考えられる。しかしながら、沖縄島を含む琉球列島では、太平洋戦争末期の昭和20(1945)年3月から7月にかけて、沖縄戦と呼ばれる日米両軍による戦闘が行なわれた。中でも、第32軍沖縄守備隊の司令部が置かれた沖縄島では、上陸した米軍と住民を巻き込んだ日本軍との間で、激しい地上戦が戦われ、人命はもとより、多くの自然と文化財が破壊された。また、戦後は米軍の支配下に置かれることとなり、昭和47(1972)年の日本復帰まで、朝鮮戦争やベトナム戦争の基地としての歴史を刻んできた。

このため、沖縄島をはじめとする多くの島々は、戦闘や戦後の動乱の過程で、戦前に作成された画像資料の多くが失われた。その結果、戦争以前の沖縄を視覚的に知る手段は、戦争以前に撮影された映像記録やそれが印刷された出版物、あるいは撮影されたフィルムそのものに寄らざるを得なくなっ

た。しかし、これらについての調査や保存のための活動は殆ど行われておらず、多くは沖縄戦で失われ、わずかに残る資料も戦後の混乱の中で潰えたものも多い。むしろ、戦前の画像資料については、沖縄以外で保管されて来たものが良く知られるような状況なのである。

また、沖縄戦および沖縄戦前後の段階で、日本軍による映像記録はほとんど残されていない。これについては、むしろ米軍によって撮影もしくは接收された静止および動画映像のみが残されており、今日ではこれが当時の沖縄の様相を知る大きな手がかりとなっている。

3. 沖縄県における画像資料の現況

沖縄県内各地では、戦前のものをはじめとして、画像資料を収集し、保存・活用する取り組みが進められつつある。ここでは、沖縄県が管轄するいくつかの機関において、どのような活動が行われているのか、簡単に紹介することとしたい。

沖縄県公文書館

平成7(1995)年8月、沖縄島南部南風原町に沖縄県公文書館が開館し、沖縄県文書をはじめ、琉球列島米国民政府文書、琉球政府文書、琉球王国関係史料の収集・整理・保管・活用のための諸活動を開始した。沖縄県立公文書館の平成14(2002)年3月段階での収集・整理資料数は別添資料1の通りである⁽³⁾。

この中で、文書を撮影したものを除く画像資料は、米軍による「沖縄占領関係写真(空中写真を含む)」17265点と「沖縄関係映像資料」1503巻がある。これらは沖縄戦時および戦後に米軍が撮影した記録資料である。これらについては、米国立公文書館に保存されていたフィルムを複製しており、一部に紙焼写真を再撮影したのものがある。したがって、写真および映像資料とも原盤ではなく、近年の複製資料である。

沖縄県公文書館ではこれらの複製を下に、平成13(2001)年度より沖縄県緊急雇用対策特別事業の一環として、空中写真735点と沖縄戦関係資料4716点のデジタル化を図り、インターネットを通じて公開している。

沖縄県立芸術大学

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館には、戦前の沖縄で活躍された鎌倉芳太郎氏の資料が寄贈されている。これらの資料は昭和61(1986)年の沖縄県立芸術大学開学に際して、寄贈されたものである。同大学では資料整理に努め、平成10(1998)年3月に『鎌倉芳太郎資料目録』を刊行しており、その内容は別添資料2の通りである⁽⁴⁾。

同書によれば、写真資料は鎌倉氏が沖縄各地で撮影されたガラス乾板とこれから焼付けられた紙焼写真であり、総数1287点という。同大学では紙焼写真をスキャナーで読み取り、画像データ化して、パソコン上で「鎌倉芳太郎写真画像データベース」を作成中という。ガラス乾板については、平成12(2000)年の段階では現状のまま保管されているとのことであった。

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館は沖縄戦後の昭和21(1946)年、沖縄民政府が現在の石川市で民家を借りて設置した東恩納博物館が母体となり、昭和28(1953)年に沖縄民政府立首里博物館と合併して首里に移転、昭和30(1955)年に琉球政府立博物館となった後、沖縄の日本復帰によって沖縄県立博物館となった。

同館には自然史・美術工芸・歴史・考古・民俗に分類された8万点余りの資料が収蔵されており、中には米国統治下に米国人によって収集・寄贈された資料も存在する。このような資料の中に、昭和32~34(1960~1962)年の間、沖縄諸島遺跡調査を行なった、アジア研究者ジョージ・H・ケア氏の採集

(平成 14 年 3 月 31 日現在)

資料群名	単位	資料収集数		資料登録数(*1)	
		H13年度	累計	H13年度	累計
琉球政府文書	簿冊	0	161,868	118	160,956
沖縄県文書	箱	1,821	27,430(*2)	0	8,341簿冊
行政刊行物	件	2,235	32,673	1,879	31,480
USCAR文書	マイクロフィルム(*3)	コマ	617,132	0	1,515,714
	映像フィルム	件	40	120	110
沖縄占領関係写真(空中写真含む)	件	1,041	17,265	7,888	16,959
英文資料	マイクロフィッシュ	枚	0	794	5,198
	マイクロフィルム	リール	0	143	680
	文書	件	1,386	1,313	8,283
地域資料	冊	9,126	75,770	847	19,529
中琉関係 档案史料	レプリカ	点	0	100	297
	マイクロフィルム	リール	0	0	12
	簿冊資料(11簿冊)	件	0	0	1,881
沖縄関係映像資料	巻	75	1,503	44	1,262
沖縄関係音声資料	巻	4	2,996	4	90
マイクロフィルム(*4)	琉政文書	リール (コマ)	146 (175,748)	0 (1,582,478)	0 (1,406,730)
	その他館撮影 ・複製(リール)	リール (コマ)	107 (17,913)	0 (1,563,302)	0 (1,309,051)
	その他館撮影 ・複製(ジャケット)	枚 (コマ)	8 (36)	0 (493)	0 0

注)

*1 資料登録数とは、資料の目録がデータベース化され、検索可能な整理を完了した資料の数です。

*2 沖縄県文書は箱単位で収集しています。書架総延長に換算すると9189,89mとなります。

*3 USCAR文書は、国立国会図書館との覚書により収集予定数が確定しています(3,200,000コマ)。また、収集は保存用、保全用(バックアップ用)、閲覧用の3セットずつ行っており、ここに掲げた統計の値は1セット分です。

*4 マイクロフィルムは、閲覧用と保存用等のデュープフィルム(複製フィルム)も含めた値です。また、収集及び登録数は、公文書管理部で撮影したものと個別収集したものを含めた値です。

考古資料と写真資料も含まれている。写真資料は 35mm スライドフィルムに撮影されており、同館ではこれらをフォト CD に集録し、デジタル画像としての活用を計画している。

4. 沖縄における画像資料の特徴と今後の課題

冒頭でも述べたように、沖縄に残る映像資料は戦争の影響を大きく受けた資料である。戦前の段階において、撮影されたであろう資料の多くは失われ、地元以外で保管されたものだけが現存している。また、戦中、戦後しばらくの間の撮影資料は、米国の手によるものが多く、保管先の多くも米国内にある。したがって、この時期の映像資料は、沖縄以外の地を探さざるを得ない状況にある。

また、これらの資料は探し当てたとしても、原盤資料が手に入ることはほとんどない。特に米国の資料については、作成当初から国家的な事業としての映像記録であったため、原盤は米国立公文書館が保管し、沖縄には複製の形でもたらされる。この点において、映像資料の劣化についてはそれほど問題化していない、問題視されていない状況にある。

これに対して、これらの映像資料のデジタル化と活用化については、沖縄県公文書館をはじめとして、積極的な取り組みが見られる。これは戦争による官・民を問わない多様な映像資料の喪失が、戦後の公的機関によって収集された資料の公開・活用の促進を後押ししていると理解される。このことは、映像資料の活用という視点からは、高く評価される部分である。ただし、デジタル化に際して、使用する機器の性能については、各機関における予算などに左右され、その精度についてはそれぞれに相違が見られる。これについては、同様の目的をもった機関の間での情報の交換と作業の高度化が望まれる。

注

- (1) 拙稿「鳥居龍蔵の沖縄先史遺跡調査」『平成 8 年度沖縄地区大学放送公開講座 琉球に魅せられた人々・外からの琉球研究とその背景・(テレビ講座)』テキスト 琉球大学公開講座委員会、平成 8 (1996) 年 8 月
- (2) 国立民族学博物館『民族学の先駆者 鳥居龍蔵の見たアジア』平成 5 (1993) 年 3 月
- (3) 沖縄県公文書館『沖縄県公文書館年報』第 4 号 (平成 13 年度) 平成 14 (2002) 年 8 月
- (4) 沖縄県立芸術大学附属研究所『鎌倉芳太郎資料目録』平成 10 (1998) 年 3 月

本目録は、鎌倉芳太郎氏が本学に寄贈された写真資料について、沖縄県立芸術大学附属研究所が平成 8 年度より行っている調査研究に基づくものである。写真資料の内訳は、鎌倉氏が大正から昭和にかけて沖縄各地で撮影したガラス乾板と、同乾板から焼付された紙焼写真である。現在紙焼写真をスキャンすることによって画像データに変換し、パーソナルコンピュータ上で「鎌倉芳太郎写真画像データベース」を構築中である。本目録は、この画像データベースの原資料である紙焼写真を対象としている。目録作成作業は各分野の専門家(後述)の協力を得て、原田が担当した。

資料の形態を大別すると、整理番号 1～421、1237～1287 は 300mm×255mm の印画紙が、422～1236 は 162mm×120mm の印画紙が、368mm×309mm の台紙に貼られ、表面には薄葉紙がかけられている。紙焼写真に番号が付されていなかった 1237～1287 は、ガラス乾板の乳剤面剥離によるものと考えられる焼きムラが著しい。なお、今回はガラス乾板に関する調査は行っていない。

資料 2 鎌倉芳太郎の「写真資料目録」凡例(注 4 文献 41 頁より)